

## 令和3年度あしたのまち・くらしづくり活動賞

### 審査講評 あしたのまち・くらしづくり活動賞

審査委員会委員長 長谷川 幸介 (茨城県生涯学習・社会教育研究会会長)

#### はじめに

令和2年度と同様、新型コロナウイルスの感染拡大が続いている中での審査になりました。コロナパンデミック第5波の渦中であり、審査は昨年同様WEB会議（ZOOM）の形式で行われました。日本社会が「パラダイムシフト（社会転換）」と「ライフシフト（暮らし転換）」という真っ只中であり、コロナパンデミック以後の「新しい生活様式」を創造しつつあることを実感させるような、オリジナルティに満ちた提案内容にあふれていました。審査委員全員、「活動内容に勇気をもたらした」「コロナ禍で様々な制約があるにもかかわらず、創意工夫が素晴らしい」「社会課題が山積みの中、みんな頑張っている」という共感の言葉に代表される感銘を受けた会議になりました。

#### 審査にあたっての留意点

##### (1) 「九つの審査基準」と現代性

審議は、「九つの審査基準」(①公共性、②成果、③主体性、④活動基盤《地域性》、⑤継続性、⑥開放性、⑦普遍性、⑧先駆性、⑨外部の評価)に基づいて、検討されました。各委員からの発言は、それぞれに評価の視点が異なり、相互の「学び」や「発見」につながる高い水準の協議内容でした。それは、現在の地域活動が多様な場面で展開されていることとの反映であり、また、多様な価値観や活動形態で行われていることの反映かもしれません。

したがって、「九つの審査基準」のどの項目に力点を置くかによって評価が異なりました。市民活動は、それだけ多くの課題に直面していることの証だと思えます。

コロナ後の社会変化への対応、AI社会の到来(Society 5.0)や長寿社会の到来など、「あしたのまちづくり・くらしづくり活動」が直面する課題は多面的で、複雑化しているのかもしれない。しかし、この審査に関わり、「あしたのまち・くらしづくり」活動賞は、その名の通り、明日の可能性を予感させるものばかりでした。「激動する日本社会の明日を予感させる」活動は、実は、日々の私たちの暮らし方にこそ、その可能性の芽があると感じました。

##### (2) 現代的課題の同時代性

しかし、多様な活動は、今ここで同時に起こっている課題への対応であるという思いを強くさせました。コロナパンデミックが人類に初めて同時代性(みんな当事者だという意識)を醸し出したように、「あしたのまち・くらしづくり」活動賞にノミネートされた活動もまた、日々、全国で活動し続けている市民に対して「みんな当事者だ!」という熱い思いを呼びかけているのだと思いました。

#### 活動事例の特徴

内閣総理大臣賞に選考された千葉県市原市の「青葉台町会協議会」は、高齢化する団地の再生という全国的課題への先進事例となる

取り組みでした。地元の中高生を企画段階から参画させ、地域全体で危機感を共有するプロセスが評価されました。市原市がSDGs認定都市となったことを背景に、未来志向で「新しい街を創るんだ」とし、まちづくり課題を6分野28課題に整理し、課題別チームでの解決対応が、新しいまちづくり運動を予感させるものでした。

内閣官房長官賞を受けた大阪府豊中市の「団欒長屋プロジェクト」は、「子育て支援」活動を中心軸に、多様で多面的、即自的で未来志向にあふれた活動内容が評価されました。子ども支援の課題が多岐にわたっていることを実感させる活動であり、課題が直面した時の即自的対応が私たちに市民活動の真価を教えてくれています。特に、子ども記者が中心となって発行している多世代交流型ZINE「だんらんしんぶん」は先駆的活動として感銘を受けました。

総務大臣賞を受けた青森県八戸市の「八戸市中心街 まちぐみ」は、「なんか楽しそう」を街中に作り出すという明確なコンセプトの下、「問題解決型」（今何をなすべきか）と「未来志向型」（これをしたらもっと楽しい街になる）を志向している活動です。地域資源の発見手法や「伝統」の磨き方にまちづくりのヒントがいっぱい隠されているように感じました。

この三つの活動は、審査員の多くが選考したという意味で共通性を感じるものだったと思います。しかし、投票数はわずかに劣りましたが、先駆性や独創性を強く感じられる活動も多く、5団体が主催者賞を受けられました。

「孤立しない子育て環境」をモットーに多様な個人や団体（飲料品店・J.A・木工業者・助産師・多彩なNPO法人など）と協働している岐阜県高山市の「特定非営利活動法人飛騨高山わらべうたの会」の活動は、連携・協働の豊かさを示しており全国の先進事例と言っていい内容でした。

沖縄県那覇市の「沖縄尚学高等学校 地域研究部 まちもどし」の活動も、観光事業に安易に依存せず、沖縄の商店街（まちぐみ）を多様なイベントを組み合わせることで活性化させようとする高校生の取り組みであり、思わずうなずいてしまいました。

岡山県総社市の「池田地区小道の駅プロジェクト委員会」の活動は、地区唯一の食料品店が閉店してしまった現実に立ち向かい、手作りで直売店立ち上げから独居老人宅への弁当宅配事業まで扱ったものであり、今後の事業展開が期待される内容でした。

さらに、山口県山口市の「特定非営利活動法人 ほほえみの郷トイトイ」は、人口減少という現実、地域のプライドをかけて「ミニスーパー+交流スペース」を立ち上げ、「地

域に笑顔を増やす」という理念で活動を展開している報告でした。「都市に追随」せず、違いつかかわりを明確にする姿勢に強く共感しました。

福岡県八女市の「特定非営利活動法人まちづくりネット八女」の活動では、国指定の重要伝統的建造物群保存地区を保存・継承するための多彩な事業内容が報告されました。伝統的職人技術の継承や子どもの修復体験活動などとともに空き家再生活動など全国屈指の内容だと感じました

このほか、20の振興奨励賞受賞団体からも先駆的で普遍的な事例が報告されています。「子ども食堂」の到達点を示唆するもの、「地域福祉の主体が市民である」ことを具体化する事例など、大きな社会転換を前にして、いずれも、市民による「新しいまち・くらしづくり活動」の萌芽と可能性にあふれたものでした。

### 最後に

審査に参加させていただき、「1年365日、どこかで、誰かが、同じ思いで活動しているのだ」という意識を強くさせていただきました。そして、私もまた、その一員にあり続けたいという気持ちを新たにいたしました。ありがとうございました。